

私の歩んできた道

内モンゴルから日本へ、そして未来へ



民族衣装着用

◆略歴◆

- 1997年 中国内モンゴル自治区チーフオン市生まれ
- 2016年 チーフオン市モンゴル族中学 高校卒業
- 2020年 内モンゴル財経大学 金融学部 卒業
- 2022年 日本へ留学 (和陽国際語学院)
- 2023年 東京農工大学農学部研究生 入学
- 2024年 東京農工大学大学院農学府農学専攻修士課程 入学

◆今のモンゴル族の生活◆

モンゴル族の名前にはさまざまな付け方があります。伝統的なモンゴル語の名前、例えば、バトゥルという名前は、モンゴル語で「英雄」という意味です。また、モンゴル族は伝統的にチベット仏教を信仰してきたため、チベット系の名前（ドルジなど）も見られます。清朝以降、漢族との交流が進む中で、完全に漢化された名前を持つ人も増えました。例えば「文静」という名前は、見た目には完全に漢族の名前です。モンゴル族には本来、部族名がありました。現代では徐々にその意味が薄れ、部族名の一部や音を使って姓を名乗ることもあります。例えば「白金霞」という名前では、「白」が姓で、「金霞」は「金色の夕焼け」を意味する名前です。モンゴル族は姓を持っていませんが、子どもが生まれ中国の身分証明書を作る際、姓の登録は自由で、姓を書かず名前だけ登録してもいいことになっています。私の名前「銀蘭」もその一例です。多くの人が「銀」が姓だと誤解しますが、実際には「韓」が姓で、「銀蘭」が名前です。現在の内モンゴルでは、昔ながらの遊牧生活を送っている人は少数派で、定住化した生活が主流となっています。しかし、遊牧文化が完全に失われたわけではありません。例えば、フルンボイル

公益財団法人 守屋留學生交流協会
第43回奨学生

ギンラン
銀蘭



市、チーフオン市、シリント市を代表とする一部の地域では、6月中旬に放牧地へ移動し、秋冬に再び定住地に戻り家畜を育てる伝統的な遊牧のスタイルが今も残っています。その中で特に注目すべきは、チーフオン市のアールコウアルチンチー北部の地域です。この地域では集団共有放牧地を持っていて、地域の遊牧民であれば6月中旬から利用できます。他の地域では放牧地は家族単位で分配され、鉄柵などで囲って管理されることが多いです。一年に一度の遊牧の移動はとても壮観で、写真1のように遊牧民たちは馬やオートバイに乗って定住地を出発し、家畜を遊牧地へと追っていきます。移動先にはれんが造りの家や伝統的なゲル（モンゴル式テント）を建てて生活します。しかし、私の故郷であるチーフオン市オンニウトチーでは、通年定住している地域が大部分を占めています。その背景には農業の収益性の向上があり、農業と牧畜業が混在の「半農半牧」地域が増加しました。

◆はじめに◆

内モンゴル自治区（以下は内モンゴル）は、ユーラシア大陸の内陸部に位置し、東西の直線距離は約2400キロ、南北の距離は約1700キロにおよびます。総面積は約118.3万平方キロメートルで、日本の国土の約3倍にもなります。このような広大な地域には、自然環境や生活習慣、文化的背景において多様性が存在します。内モンゴルは、モンゴル族が多く居住している地域であり、2020年の統計※によると、424.7万人で、内モンゴル全人口の17.6%を占めています。

※ 『内モンゴル統計年鑑2023』

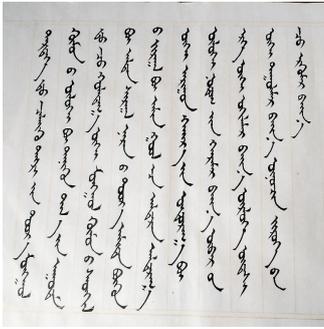


写真3 モンゴルの伝統文字



写真2 伝統的な結婚式の衣装



写真1 家畜を遊牧地に追っていく様子（写真3枚とも筆者撮影）

モンゴル族の伝統的な民族衣装は非常に美しく、地域によってデザインや色彩が異なります。ただし、現代では日常的に着用することは少なく、新年や結婚式といった特別な場面でのみ着用します。

写真2は、オンニウトチーの結婚式で着る伝統的な衣装の一例です。また近年では、モダンなデザインの民族衣装も登場しており、日常生活でも気軽に着られるスタイルが増えています。

内モンゴルでは、子どもが馬に乗って通学するのといった誤解を受けることがあります。ですが、実際はそうではありません。小学校から大学に至るまで、ほとんどの学校に寄宿舎があり、特に中学からは多くの生徒が寄宿生活を送ります。かつては内モンゴルには、モンゴル語で授業を行う

学校が幼稚園から高校まで整備されており、中国語の授業を除いて、すべての授業がモンゴル語で行われていました。大学にもモンゴル語で開講される授業が多くありました。しかし近年、モンゴルの伝統文字（縦書きで書かれる美しい書体、写真3）は、今もモンゴル語の授業で使われていますが、中国語が第一言語としての地位を強めており、モンゴル語の科目以外のすべての授業が中国語で行われるようになりました。

◆日本留学という夢の実現◆

私は小さい頃から比較的畑地の多い農村で育ち、学校の長期休暇には家族と一緒に畑仕事をしていました。草取りからとうもろこしの運搬まで、あらゆる作業を経験しており、農村の人々の苦労と両親の大変さを実感しながら育ちました。そのため、私はより一層勉強に励むようになりました。そして大学の講義の中で、ある先生が日本での留学体験を語ってくださったことをきっかけに、私は日本に関心を持ち始め、やがて「日本で学びたい」という夢を抱くようになりました。中国では大学院入試は全国共通の日程ですが、日本では大学ごとに試験日程や内容が異なり、複数校に挑戦できる点にも魅力を感じました。

2020年の夏に大学を卒業し、同年10月には日本への留学を予定していましたが、新型コロナウイルスの影響で渡航が延期され、2022年4月によく留学をスタートすることができました。

日本に来て最初に感じたのは、気候と食文化の違いです。内モンゴルは乾燥しており、羊肉中心

の食生活が一般的ですが、日本は湿度が高く、おいしい羊肉もあまり見かけません。留学3カ月後には「なか卯」という飲食チェーンでアルバイトを始め、最初はわさびすら覚えられませんでした。が、店長や同僚が親切に教えてくださり、次第に全てのメニューや調理法を覚えることができました。その後、すし店やコンビニでも働きましたが、昨年、修士課程に進んでからは学業に集中するため、現在はコンビニのバイトだけにしています。私だけが外国人という環境ですが、皆さんが非常に温かく接してくれています。

◆研究テーマと将来の展望◆

モンゴル族はもともと「五畜」（馬、牛、羊、ヤギ、ラクダ）に依存した遊牧生活を営んできましたが、現在は農業と畜畜が共存する生活が一般的です。私は、内モンゴルの「半農半牧」地域における農業経営と農業融資の展開についての研究をしています。近年、生産力の向上という課題の中で、農牧業の経営と金融がどのように関係している、地域の発展につながるのかを明らかにしたいと考えています。

農村の小さな町から日本という異国の地へと学びを進める中で、私は多様な教育環境や文化に触れてきました。そして多くの人の支えと自らの努力によってここまで来ることができました。今後とも学問に真摯（しんしん）に向き合い、博士号の取得を目指して邁進していきます。そして将来は、モンゴル族の地域発展に貢献するとともに、中国と日本の学術交流の架け橋となれるよう尽力していきたいと考えています。